

アメリカン・ボード宣教師文書

——同志社女学校女性宣教師を中心として——

〈M. F. デントン書簡一訳および註一〉(9)

坂 本 清 音 監訳
矢 吹 世紀代
杉 野 マリ子
檜 本 尚 美
小 島 紀 子
岩 倉 苗 実
柿 本 真 代

〈パートン書簡 B-13〉【矢吹世紀代 訳】

1901年 2月26日

メアリー F. デントン

カリフォルニア州

ロサンゼルス ダウニー通り813番地

拝啓 デントン様

パサデナからつい先ほど届いたお手紙¹を読んですぐに返事を書いています。
お手紙に書かれている誤解を解いて、必要と思える事柄などお伝えしなければと考えています。

女性宣教師は、どの支部から派遣されようと、帰国の費用はウーマンズ・

ボードが持つというルールに従い、今回のデントンさんの帰国費用は太平洋ウーマンズ・ボードが支払いました。現行の規定ではそうとなっておりますし、実際、これがアメリカン・ボードの財務上の「規則」なのです。ウーマンズ・ボードの宣教師にかかる費用に関しては、アメリカン・ボードから支払われることはありません。ただし、ボストンのウーマンズ・ボードが給与をお支払いしている何人かの宣教師夫人²に限って言えば、帰国の際にはアメリカン・ボードから、渡航費用が支払われることになっています。そして、これはどの宣教師の場合も例外なく、「お里」（実家）までの費用であって、それ以上が支払われることはありません。

デントンさんが賜暇を取られる前の日本ミッションからの要請では、単にこの国で賜暇をとるというものでしたが、宣教師が「お里」に着かれると必要経費はなくなるというのがボードの変わらぬ認識です。それは大原則です。もちろんデントンさんの「お里」が東部にあるのでしたら一もっとも私にはあなたがどこを「お里」と呼ばれるのかは分かりませんが一太平洋ウーマンズ・ボードにそこまでの費用を払ってもらう資格はあるでしょう。数日前に太平洋ウーマンズ・ボードに宛てた手紙で、デントンさんがこの夏、東部へ来られるのは大変有益なことであり、私としては、その旅費をウーマンズ・ボードが用立てるのは、大変理にかなった支出になると思うと伝えました。これは、事務局にも伝えてある通り、あくまでも私個人の考えとしてしたことです。

ボードの運営に関して**粗探し**をする人はいるものです。ストロング博士³が最近作られた小冊子を同封いたします。アメリカン・ボードの支出明細を詳らかにするものですが、およそ宴会と思しきものにボードが1セントたりとも支出したなど、私は聞いたこともありません。アメリカン・ボードの基金がどれほど入念に管理されているか、支出に際しても、事前にどれほど慎重な検討がなされているかを、ご寄付をくださった方々にご理解いただけるといいのですが。

デントンさんが東部へお越しになる道が開けないことを大変遺憾に思っています。ご帰国なさいまして以降、太平洋ウーマンズ・ボードから適切な手当での支給がなされているかお知らせいただけないでしょうか。太平洋ウーマンズ・ボードはあなたに1ヶ月あたり30ドルをお支払いするというのが、私どもの認識です。さらにキリストの義を広めるための旅行の場合は、旅費の負担は一切ないはずで。

立ち入ったお願いになりますが、太平洋ウーマンズ・ボードからいくらの支給があったかをお知らせ頂けませんでしょうか。ウーマンズ・ボードからこちらの経理には、月に30ドルお支払いすると報告が来ておりますが、何か行き違いがあったかもしれませんし、本来支払われるべきものが支払われていないということも考えられますので。もし本来支給されるはずの額が相応にあるとすれば、東部への費用を十分にまかなえるかもしれません。私どもといたしましては、万事ご納得いただけるように適正に対応していきたいと考えていますし、私自身も最善を尽くしたいと思っています。

敬具

ジェームズ L. パートン

どうぞ東部ご訪問をお諦めになりませんように。こちらで現在の勘定書が適正であるかどうか確認の上、善処いたしますので。

1. デントン書簡〈281〉D39の返信。その中で、デントンはボストンに行く費用はアメリカン・ボードが出してくれると思っていたが、そうでないことがわかり、経済的に無理なので、このままカリフォルニアにとどまり、現地の学校を見学すると書いた。
2. ウーマンズ・ボードが支援する宣教師は、原則として独身女性宣教師と決まっていたが、宣教師夫人も現地で伝道活動をしている場合には、ウーマンズ・ボードから給与が支払われることもあった。
3. Strong E. E. (生没年不詳) アメリカン・ボードの機関誌 *The Missionary Herald* の1900年6月号では、本部の編集担当幹事 (Editorial Secretary) として

名前が挙がっている。

〈デントン書簡283〉【杉野マリ子 訳】

メアリー F. デントン
ロサンゼルス
ダウニー通り813番地
1901年3月23日

拝啓 バートン博士

詳細にわたるお手紙をありがとうございました。

先日お手紙を差し上げましてから、私どもの前会長のジェームズ氏¹にお目にかかる機会がありました。なんとジェームズ氏は、私の東部行きを費用を払おうと言ってくださいました。ジェームズ氏夫妻のご親切とご厚意には感謝してもきれません。東部に行けば日本に戻るのが7月に延びますが、道が開かれるなら是非いらっしゃいと言って下さるあなた様のお手紙で行く決心ができました。来訪無用という電報が来ない限り、私は4月1日頃には出発し、ワシントンDC、フィラデルフィア、ニューヨークを経由して東部へ向かいたいと思っています。フィラデルフィアのリチャーズ博士²からご招待を頂いていますが、随分昔のことですので、もう一度お手紙を出してボード関係者にもお会いできないか尋ねてみます。オーバーブルックのウィスター・モリス夫人³にもご歓待いただけるはずなのですが。ワシントンでは一泊だけして、京都のデイヴィス夫人⁴を支援している教会を訪問出来ればと思っています。

ワシントンでの私の住所は、ノースウェスト26番通り1517番地のアンヴィル・M・エリオット夫人⁵気付けになると思います。ラドクリフ⁶で1週間、ウェルズリー⁷で1週間、大学寮に滞在させて頂ければと思いますが、いかがでしょうか。アメリカの大学の働きを内部から眺めてみたいのです。大学の建物を歩いて回るだけでは、私にはためになりません。ボストン市内では、大学セ

ツルメント⁸のうちいずれかに一週間ほど滞在したいのですが。日程が確定しましたら、またお便りさせていただきます。博士からの返信をここ西部にいる間に受け取れましたら幸いです。まだ少し時間はあると思いますし、必要な場合はワシントンに送ってくださっても受け取ることはできます。

敬具

メアリー・フローレンス・デントン

1. James, Daniel Willis (1832-1907) アーモスト大学卒業。従弟と築いた会社が成功して世界でも最大級の銅の生産事業となる。鉄道事業なども手掛け莫大な財を成した。ジェームズ氏は、この1901年の書簡ではアメリカン・ボードの前会長とあるが、機関誌 *The Missionary Herald* の1900年6月号では副会長として名前がある。同志社女学校のジェームズ館建設資金もジェームズ氏没後、夫人と子息より多額(米貨10万ドル)の寄付を受けている。
2. リチャード博士 詳細不明。
3. Mrs. Wistar Morris デントン書簡 [140] 注6 参照
4. Davis, Frances H. (1854-1922) アメリカン・ボード宣教師、1883年4月 Frances Hooper として着任。1893年まで同志社女学校で教える。その後、同志社英学校の J. D. Davis の後妻となる。
5. Mrs. Anvil M. Elliot 詳細不明
6. Radcliffe College のこと。1879年設立。マサチューセッツ州ケンブリッジ市にあった名門女子大学。東部有名女子大学のグループ、セブン・シスターズのメンバーであった。1999年からはハーバード大学と完全合併した。
7. Wellesley College のこと。マサチューセッツ州ウェルズリーにある小規模の私立大学。1875年に設立されたリベラルアーツの名門女子大学。ラドクリフ同様、セブン・シスターズのメンバーでもある。
8. College Settlements ポストンで最も有名な大学セツルメント(隣保館)は、1892年開設の Andover House であるが、当時デントンがどの大学セツルメントのことを頭に置いていたかは不明。

〈デントン書簡284〉【樫本尚美 訳】

ロサンゼルス

ダウンニー通り813番地

[1901年]¹ 3月28日

拝啓 バートン博士

[太平洋ウーマンズ・ボード] 南部地区²の集会が4月10、11、12日にレッドランズ³であり、当地のご婦人方が私の出席を望んでおられますので、神の御心ならば⁴、4月12日の午後レッドランズを出発します。少なくとも1日はワシントンD.C.に、そのあとフィラデルフィアに立ち寄ることができればと考えています。全てはあなた様のお返事次第ですが。

もしレッドランズにある会衆派教会牧師館のJ. H. ウィリアムズ夫人気付でお手紙を送ってくだされば、受け取る事はできるでしょうし、ご無理だと思われたら、ワシントンD.C. 郵便局留置きか、ワシントンD.C. ノースウェスト26番通り1517番地のアンヴィル・M・エリオットさん気付でも、私の許に届くかと思えます。

ボストンに着くとすぐに音楽学校⁵に向かいます。日本人の若い女性⁶を連れて行くことになっているのです。そこに少なくとも一晩滞在出来ればと思っています。そのあと、できれば1週間以上はラドクリフ⁷の寮の、別棟ではなく大学内の建物で、学生や教員と一緒に過ごすことが出来れば、と願っています。とにかく今回の旅行を真に価値あるものにして日本での仕事に活かしたいのです。ジェームズ氏⁸とホプキンス大佐⁹には、どのように言い表せば良いのか分からない位によくして頂いています。

敬具

メアリー・フローレンス・デントン

1. 書簡に年の記述はないが、前便デントン書簡 [283] では、1901年3月23日とあることから、1901年3月28日付だと分かる。
2. サンフランシスコとロサンゼルスを中心としたカリフォルニア州南部地区の支部
3. Redlands サンバーナーディノ山脈の西麓にある南カリフォルニアの都市で、ロサンゼルス近郊。

4. D.V. Deo volente の略。「神の御心にかなえば」のラテン語。英語でも、‘God willing’ の表現がある。一般的には「事情が許せば」の意で用いられるが、クリスチャンの間では、原義の意味で使うことが多い。
5. 前出ロス書簡参照。ボストンにある New England Conservatory of Music のこと
6. 松田幸のこと。当時 Mill’s College で音楽の勉強をしていた幸を、ボストンの音楽学校に受け入れてもらうために、*The Congregationalist* に投書したロス氏に手紙を書いて手筈を整えていた。(前出ロス書簡およびデントン書簡〈275〉参照)
7. Radcliffe College 前出〈283〉
8. James, Daniel Willis 前出〈283〉
9. Col. Hopkins 詳細不詳

〈バートン書簡 B-14〉【小島紀子 訳】

1901年 3月30日

メアリー F. デントン

ワシントン D.C.

ノースウエスト、26番通り1517番地

拝啓 デントン様

3月23日付のお手紙を嬉しく拝見しましたが、あいにく手元に届いたのが29日でしたので、4月1日のご出発までにお返事することが出来ませんでした。

デントンさんがこの度、東部にお越しになって、こちらのご婦人方にお会いになり、ボード事務所とも連絡がとれて東部の学校を幾つか見て回られるとのこと、一方ならず喜んでおります。ご要望通り、1週間ウェルズリーにいられるよう手配できるとも思います。もしかすると、ラドクリフ¹には寮がないことをご存知ないのかもしれませんが、学生たちはそれぞれ個人のお宅に下宿しているのです。マウント・ホリオーク²に行かれるのであれば、きっと1週間ぐらいそこで過ごされることも十分可能かと思えます。ご指示がなかつ

たようでしたが、この辺りの手配もしてみようと思います。ホリオークとウェルズリーは2校とも非常に典型的かつ代表的な学校です。

デントンさんが到着されるころ、私はおそらくボストンを発っているのではないかと思います。ここでお会いできないとすると残念ではありますが、フィラデルフィアと南部にお立ち寄りになるという旅程を大幅に変更されるのは賢明ではないでしょう。私は4月27日にボストンを出航する予定です。デントンさんの足取りが判るように、ワシントンから短い手紙をください。あるいはボストンで見学される場所はウッズ氏³が管理しておられるアンドーバー・ハウス⁴かもしれませんね。そこで数日を過ごされて、運営方法を視察できるような手配もきっとできると思います。

デントンさんのご旅程をよくよく拝見してみますに、その後はクック夫人の別荘⁵で1か月ほど過ごされ、ゆっくりと休養を取られますことを嬉しく存じます。

敬具

ジェームズ L. バートン

1. Radcliffe College 前出 (283)
2. Mount Holyoke College マサチューセッツ州サウス・ハドリーにある私立大学。1893年設立。当時、アメリカで一番多くの女性宣教師を世界に送り出していた大学。
3. Woods, Robert Archey (1865-1925) アンドーバー神学校卒業。William J. Tucker 教授の勧めで、Arnold Toynbee と Samuel A. Barnett 牧師がロンドンで最初の“university settlement” (大学セトルメント運動) として建設していた Toynbee Hall の住人となり、実際に貧者を助け生活を共にする活動に参加した。帰国後、この経験を書物にまとめて1891年 *English Social Movements* として出版。そして1892年、タッカー教授とボストンの Rollins Street 6 番地に、同様の施設を Andover House として開設し、Woods はこの建物の最初の中心的な働き手となった。
4. Andover House 註3にあるように、1892年ボストンで最初に設立されたセトルメント。最初の住人は4名であった。1895年、アンドーバー神学校との関係よりも、地域や近隣との結びつきを重点に置くため South End House に改名。

5. クック夫人の別荘 [B-11] 注参照

〈パートン書簡 B-15〉【岩倉苗実 訳】

1901年 4月 3日

メアリー F. デントン

カリフォルニア州

レッドランズ

拝啓 デントン様

3月28日付けのお手紙を今朝受け取ったところです。

先回のお手紙で教えていただいたワシントンの宛先へ月曜日に返事を出しましたが、そこに書いたことをもう一度繰り返しておきます。東部へ来られることを大変嬉しく思います。ご予定通り4月12日に出発してこられるのでしたら、27日の出航前にお目にかかることができるでしょう。

ラドクリフ¹には寮に類するものは一切ありませんが、ウェルズリー²とマウント・ホリオーク³には、それぞれ1週間ずつ滞在できるかどうか、すでに問い合わせてあります。ボストンのデニソンハウス⁴で隣保事業の視察をされたいようでしたら、こちらへ到着されてからでも、すぐにお手配できると思います。

皆があなたを心から歓迎することは申し上げるまでもありません。昨日ホプキンス大佐⁵にデントンさんがお越しになることをお伝えしたところ、大変喜んでおられました。

敬具

ジェームズ L. パートン

1. Radcliffe 前出 (283)

2. Wellesley 前出 (283)

3. Mt Holyoke 前出 (B-14)
4. Denison House ポストンの古い South Cove 地区で Wellesley College の教員や卒業生による the College Settlement Association (学生セツルメント協会) が1892年に設立した隣保館。特に近隣の貧しい移民に対して社会教育事業を行った。ノーベル賞受賞者の Mary Kennedy O'Sullivan や女性飛行家の Amelia Earhart など各界の著名で有能な女性がここで働いていた。

〈ダニエルズ書簡 DA-2〉【柿本真代 訳】

1901年7月25日

メアリー・F・デントン
カリフォルニア州
サンノゼ
シャーマン通り1099番地

拝啓 デントン様

たった今、お手紙を受け取りました。アルブレヒト博士¹とマードック²さんからの2通の手紙も同封されておりました。まずはお尋ねの件にお答えしておきますと、ウォーレン³さんのことはよく存じています。子供の頃からの知り合いですし、手紙のやり取りもしてきましたので、アルブレヒト博士が彼女についておしゃっていることはすべて間違い無いと申し上げておきます。ただしウォーレンさんはまだ、任地へ赴く用意が出来ているとは思えません。彼女自身も同じ気持だろうと思います。来年には準備に取り掛かり、その上で応募する決意をしてもらえればと思います。

マードックさんのことも大変気に掛かっていますが、あなたもお考えのように、彼女は医療宣教師になるために長期間、すでに3年近くも準備をしているわけですから、その計画を変更するようにと促したところで、それを受け入れるかどうかは疑わしいところです。

同封して下さったパトナムさん⁴の住所につき詳細な部分はすべてわか

りましたが、肝心の住んでおられる市ないし町が書かれておりませんので、探し出すことは難しいと思いますよ。

お手紙をありがとうございます。ご努力が報われますことをお祈りしています。

敬具

C. H. ダニエルズ

1. Albrecht, George E. (1855-1906) プロシア生れ。1874年ベルリンの士官学校卒業後、アメリカに渡り、1882年オベリン神学校を卒業し1900年に同校より神学博士号を取得。1887年来日し、新潟・前橋ステーションで働いた後、1889年から京都ステーションに移り、1904年まで同志社大学で組織神学を教える。同年帰国し、アメリカン・ボードを退いて国内伝道に携わった。
2. Miss Murdock 詳細不明
3. Miss Warren ”
4. Miss Putnam ”

追記

これまで、ミス・デントンの第1回賜暇休暇に関しては、1900年3月31日（正確には30日に乗船）に横浜を出港したことと、1901年10月11日（約1年半後）に同志社に復帰したことしか分かっていなかった。しかし、この1901年7月25日のダニエルズ書簡や、前回と今回のデントンとボードとの往復書簡を通して、約1年半の賜暇期間の概略が判明した。

すなわち、帰米して活動を開始したのは、1900年5月20日頃～1901年4月10日頃、約11カ月にわたって西部で日本伝道の報告会をし、1901年5月から7月までの2カ月強、ボストンで研修。1901年7月25日～9月20日（2カ月弱）再び西部で過ごした後（その間1901年9月4日の太平洋ウーマンズ・ボードの年会に出席）、日本に戻った。

特に帰国のルートに関しては、1901年9月20日サンフランシスコ出港のDoric号（上海行き）に乗船。10月8日横浜着、そのまま神戸まで行き、10

月10日下船したことが、宣教師研究会メンバーの矢吹世紀代により、横浜開港資料館の乗船名簿（*The Japan Weekly Mail* 1901年10月号）から明らかにされた。京都までは汽車に乗って、翌日の10月11日に帰着したのであろう。